

上代特殊假名遣母音(的特徴)對立説の検討 : 併せて 上代語の母音體系について論ず

笠間, 裕一郎
東京外国語大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1657842>

出版情報 : 語文研究. 119, pp.14-34, 2015-06-06. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



上代特殊假名遣母音（的特色）對立説の検討

— 併せて上代語の母音體系について論ず —

笠 間 裕一郎

1 はじめに

奈良時代日本語奈良方言（以下上代語とする。）に見える上代特殊假名遣の音韻論的解釋の内、甲乙の對立を母音の音色（或いはその變化）に求める見解（以下この見解を「母音（的特色）對立説」とする）就て検討を加へる。併せて上代語音韻體系の内、その母音體系に對する僻見を述べる。

上代特殊假名遣の橋本進吉による再發見以降、これに就いて生じた主要な問題は以下の二つである。

- (1) a. その音價推定
- b. その音韻論的解釋

(1) a の音價推定は、森博達（1991）によつて、「少なくとも A よりは B とするのが妥當である」と云ふ形で、漢語音韻學からみて凡そ妥當な見解が示された處である。然し乍ら、(1) b の方は未だ諸家に論があり、未だ決着が着いたとは言ひ難い。

(1) b には、大きく分けて二つの見解が存在してゐる。

- (2) 上代特殊假名遣に於る甲類對乙類の辯別的特点を
 - a. 母音（的特色）に求める見解
 - b. 子音（的特色）に求める見解

(2) b の検討は、本稿の紙幅を大幅に超えるので別稿にて行なふこととし、以下 (2) a の検討をおこなふ。

2 母音（的特色）の對立説に立つ諸家の先行研究

イ列・エ列・オ列甲乙の對立の内、何れかを母音（的特色）の對立説に立つ諸家の先行研究を纏めると、以下の表 1 の如くなる。^(注 1) 猶、松本克己（1976）は

全て母音（的特色）の対立とは見ないが、オ列甲類とオ列乙類は異音関係にあるかどうかは、本稿の議論で重要な事であるので、敢へてここで取り上げる。

表 1 代表的な先行研究の見解

	イ列甲乙	エ列甲乙	オ列甲乙
Yoshitake (1934) ^(注2)	/i/ 對 /ɪ/	/e/ 對 /ɛ/	/o/ 對 /ɔ/
服部四郎 (1958)	/j/ の有無	/j/ の有無	/o/ 對 /ø/
大野晋 (1974)	/i/ 對 /ɪ/	/e/ 對 /ɛ/	/o/ 對 /ø/
松本克己 (1976)	/j/ の有無	/j/ の有無	異音關係
大野晋 (1982)	/i/ 對 /ɪ/	/e/ 對 /ɜ/	/o/ 對 /ø/
Sibata & Mitsuishi (1979)	/i/ 對 /ɪ/	/e/ 對 /ɛ/	/o/ 對 /ɔ/
森博達 (1981)	/i/ 對 /i/ ^(注3)	/e/ 對 /əi/ ^(注4)	/o/ 對 /ə/
早田輝洋 (2009)	/i/ 對 /ui/, /əi/	/e/ 對 /ai/	/o/ 對 /ə/

以下では、以上の各見解に對する検討をおこなひ、その上で僻見を述べる。
考察はオ列甲乙の想定に問題があると思はれる見解から進められ、次にエ列甲乙、イ列甲乙の想定に問題があると思はれる見解へと進む。

3 各説の検討

3.1 オ列甲乙の想定に問題があると思はれる見解

3.1.1 オ列甲乙を /o/ 對 /ø/ とする説の検討

(大野晋 (1974)、同 (1982)、服部四郎 (1958))

大野晋 (1974) は上代語の母音體系として /i, e, a, o, u, i, ɛ, ø/ からなる 8 母音體系を想定する。また服部四郎 (1958) は /i, e, a, o, u, ø/ からなる 6 母音體系を想定する。

これ等を表の形で表すと次の様になる。

表 3 大野晋 (1974) の解釋

	前舌	中舌	後舌
高	i	ɪ	u
中	e	ø	o
低			a

表 4 服部四郎 (1958) の解釋

	前舌	中舌	後舌
高	i		u
中	e	ø	o
低	a		

大野晋 (1974) の表 3 の體系には既に服部四郎 (1976a) (1976b) 及び松本克己 (1976) の批判が既にある。この體系に對する主な批判としては、

- (3) a. 類型論的に、より開口度の大きい母音の方が、より開口度の小さい母音よりも多いと言ふ、一般的な母音體系ではない。
- b. エ列甲乙、オ列甲乙がさうである様に、有標な母音への無標な母音の合流を想定せざるを得ない。
- c. そもそも、この様な體系を持つ言語が見いだせない。

である。これらについては、既に諸家が論ずる處であるので、本稿では踏み込まない。猶、大野晋 (1982) は母音體系を示してゐないので、どの様な體系を考へてゐたか分らない^(注5)。處で、これら解釋では、オ列甲乙の對立は母音 /o/ と /ø/ の對立である。そして、子音 F (若しくは p), b, w (『日本書紀』以降は m も)^(注6)の後でこの對立は中和する。スキーマを表すと次の様になる。

- (4) 中和規則
- ø → o/F, b, w^(注7)(m) —

この解釋は、オ列甲乙の主要な對立を舌の前後と解釋する。従つて、先行する兩唇音が舌の後退を引き起こすと解釋するのだが、これは音聲學的に妥當な理由付をし難い。

寧ろこの様な條件下では、圓唇・非圓唇の對立の中和の方が音聲學的に妥當である。これは兩唇の調音運動がある子音の後に現はれる母音の、兩唇による調音の有無による對立の中和と考へられ、自然である。

3.1.2 オ列甲乙を /o/ 對 /ɔ/ とする説の検討

(Yoshitake (1934)、Sibata & Mitsuishi (1979))

この説は、オ列甲乙の對立を開口度の差に求める見解である。これら説の内、Sibata&Mitsuishi (1979) には松本克己 (1984) による類型論的見地からの批判が存在する。また、森博達 (1991) によれば、エ列甲乙の對立は「前舌対非前舌の対立によって弁別される」ので、Yoshitake (1934) の想定する開口度の差ではない。

表5 Yoshitake (1934) の解釋

	前舌	後舌	
		非圓唇	圓唇
高	i	ɪ	u
中高	e		o
中低	ɛ		ɔ
低	a		

表6 Sibata & Mitsuishi (1979) の解釋

	前舌	後舌	
		非圓唇	圓唇
高	i	ɪ	u
中	e	ẽ	o
低		a	ɔ

處で、Yoshitake (1934) は漢字音側に開口度の差がなかつた爲にやむを得ず、音聲的に前舌の中心音を持つ〔祭開 A〕類字をエ列甲類に、音聲的に非前舌の中心音を持つ〔灰合一〕〔哈開一〕類字をエ列乙類に用ゐた可能性を排除しきれない。^(注8)

然し乍ら、先にも見た様に、オ列甲乙の對立に目を向けると、やはりこれらの想定は兩唇閉鎖音の後で、母音の上昇が生じたと考へざるを得ない。スキーマは次の通り。

(5) 中和規則

ɔ → o / F, b, w (, m) __ (子音は三石泰子 (1987) による。)

これも、(4) 同様オ列甲乙の主要な對立を圓唇性の有無に求める見解と比べると、考へがたい規則である。

また、森博達 (1991) の示す處に據れば、『日本書紀』α群に於て、サ行子音に對し用ゐられた聲母は各列音に對し、以下の様になつてゐる。

表7 列音と聲母の關係

列音	イ列一類	エ列一類	ア列	オ列乙類	ウ列	オ列甲類
聲母	心, 書, 精, 章	心, 書, 常, 章	心, 精	精, 從, 生 ^(注9)	心	心
音韻論的解釋	/s, c, ts, tɕ/	/s, c, z, tɕ/	/s, ts/	/ts, dz, ʃ/	/s/	/s/

既に森博達 (1991) で「サ行の各頭音の音価は、後続母音の性格の近似によつて、音理に叶った形で整然と三種に分類されるのである」と述べられてゐる處^(注10)である。これを言語學的に解釋し直せば、イ列・エ列一類（何れもこの場合は甲類相當）、ア列・オ列乙類、ウ列・オ列甲類が夫々自然類をなしてゐると言ふことになる。

つまり、ア列音とオ列乙類は同じ類をなすが、同時にオ列乙類がウ列・オ列甲類と同じ類をなしてゐるのではない。^(注11)やはりこれらの見解は取り難い見解で

あらう。

3.1.3 オ列甲乙の別を音韻論的對立をなさないとする説の検討

(松本克己 (1975)^(注12)・同 (1976) 他)

この説はオ列甲乙の別を音韻論的對立をなさないとする説である。母音體系は現代日本語東京方言同様に /i, e, a, o, u/ となる。この説に關しては服部四郎 (1976a) 等の批判が存在するが、近年木田章義 (2012) が最小對を具體的に舉げて批判してゐる。その最小對の一例を挙げる。

(6) コシ (越) — こシ (腰)

しかし、これらは「アクセント」も含めてみると擬似最小對の可能性がある。今、秋永一枝他編 (1997) によつて「アクセント」も含めた最小對を挙げる。

(7) コシ [LL] (越) — こシ [LL] (塔などの一つ一つの層)^(注13)

上代語の「アクセント」システムについてはまだ明確ではないが、金田一春彦 (1983) や森博達 (1991) は平安時代日本語京都方言と殆んど變はらないと言ふ。これに従へば、同方言の「アクセント」を解釋した早田輝洋 (1998a)、鈴木豊 (1999)、屋名池誠 (2004) 等によつても、擬似最小對とは考へられない。^(注14)

従つて、先行研究に従ふ限り最小對が存在するので、オ列甲乙の對立は音韻論的に有意と考へざるを得ない。

3.2 エ列甲乙の想定に問題があると思はれる見解

3.2.1 エ列甲乙の對立を /e/ 對 /ei/ とする見解の検討 (森博達 (1981))

表8 森博達 (1981) の解釋

	前舌	中舌	後舌
高	i	i	u
中	e	ə	o
低	a		

エ列乙類は二重母音 ei とする。

森博達 (1981) は、大野・服部・松本論争の後、漢語音韻學を用ゐて上代語の母音體系に迫つた論である。この論では、上代語の母音音素として /i, e, a, o, u, i, ə/ を想定し、音聲的にはそれぞれ [i, e, a, o, u, ɪ, ə, ə̃] とする。表の形で表すと表8の如くなる。

この論に對しても、松本克己 (1984) が既にその想定するエ列乙類に對し批判を加へてゐる。

批判はエ列乙類のみ何ゆゑ二重母音と考へるのかと言ふ點であるが、實は、音素として、或いは基底で /əi/ と考へながら、音聲として、或いは表層で [əě]^(注15) と考へる點にも問題が存在する。

音聲と音韻、或いは基底と表層の乖離を考へるにしても、やはり音韻論ならば基底或いは音素から音聲學的に妥當な過程を経て、表層或いは音聲が得られなければならない。今、森博達（1981）の想定をスキーマで表はせば次の如くなる。

- (8) a. əi → əě/k, g, p, b, m ____^(注16)
b. əi → e/t, d, ts, dz, n, l, j, w ____

まづ、(8) a の /ə/ の後の /i/ の低下である。子音側にそれを引き起こす様な調音方法が想定されないにも拘らず、この様な變化を想定しなければならない。^(注17)

(8) b も基本的に [+coronal, +anterior] の子音によつて引き起こされてゐると考へることになるが、何故二重母音 /əi/ の融合がこれらの環境で生じるのか謎である。

結局この解釋では音聲學的に妥當な出力過程を與へられないので、取り得ない。

3.3 イ列甲乙の想定に問題があると思はれる見解

3.3.1 イ列甲乙の對立を /i/ 對 /ui/, /əi/ とする見解の検討（早田輝洋（2009）の検討）

この説はイ列・エ列甲乙の對立を基底で母音連續 /i/ 對 /ui/, /əi/ ・ /e/ 對 /ai/、表層で [Ci]對[Ci]・[Ce]對[Ce] と考へる説である。早田輝洋（2009）の想定する母音體系は服部四郎（1958）に同じ。

この説には、想定する表層の問題も存在するが、それは別稿にて論ずる事とする。ここでは基底で以上の様な二重母音と考へる、その妥當性に就て検討する。

母音融合には一般的な傾向があり、一般的には先行母音と後續母音の中間値を取る。勿論それも當該言語の母音體系との關連がある事を Casali（1998）は述べる。^(注18)

さて、早田輝洋（2009）が想定する母音體系は、エ列乙類に就ては一應問題がない。處がイ列乙類は先づ /ui/ と /əi/ の絶對中和を想定しなければならない。

その上ここで想定される母音融合は、例へば傳統的尾張方言の /ui/[y]^(注19) の様な、中間値を取らない迄も先行する母音の圓唇性を保持してゐる譯でもない。

さらに ui, əi → ʷi (イ列乙類の生成)、ai → ʷe (エ列乙類の生成) といふ母音融合規則を想定すると、動詞と形容詞に別個の(形態)音韻規則を假定せざるを得なくなり、記述的餘乗性が出て来る。

具體的には、この解釋だと動詞の「連用形」屈折接辭は //i// となり、上記の規則に依て「二段動詞」の「連用形」が正しく出力される。しかしながら、形容詞の所謂「形状言」^(注20)がこの規則では正しく出力されない事が豫測される。この規則が豫想する處では「ク活用形容詞」の「形状言」は、

(9) 母音終りとする分析の場合

- a. taka]形容詞語基 + 名詞化接辭 [i → *takʷe
- b. təpə]形容詞語基 + 名詞化接辭 [i → *təpʷi

(10) 子音終りとする分析する場合

- a. takas]形容詞語基 + 名詞化接辭 [i → *takasʷi
- b. təpəs]形容詞語基 + 名詞化接辭 [i → *təpəsʷi

となり、正しい語形 [taka] (「高」)、[təpə] (「遠」) を得られ^(注21)ない。

結局、この考へ方を取ると不自然な、或いは記述的には餘乗な説明を試みなければならなくなる。

ちなみにこの見解には松本克己(1984)が指摘する問題も存在する。即ち、何故イ列乙類がオ列乙類と平行する關係(イ列 /Ci/ (甲類) — /Cəi/ (乙類)、オ列 /Co/ (甲類) — /Cə/ (乙類))にあるのに、一方は兩唇音の後で對立が中和し、一方は冠音及び接近音の後で對立を失ふのかである。

4 筆者の見解

4.1 上代語の母音體系

以上、これまでの「母音的對立說」に立つ諸家の見解について検討を加へ、それぞれに問題があることを示した。

ところで筆者は「子音的對立說」に立たず「母音的對立說」に立つ。では筆者の見解はどの様なものであらうか。

筆者の見解は /i, e, a, o, u, i, ə, ɜ/ からなる八母音體系をなしてゐたと言ふものである。この體形は次の表の様な三列四段の體系である。

この體系は低母音に於て、前後の對立がない。高母音に於ては前後の對立が、

表9 上代語の母音體系概見

	前舌	後舌	
		非圓唇	圓唇
高	i	i	u
中高	e	ɤ	o
中低	ɜ		
低	a		

するに、カシュミール語^(注24)の母音體系と一致する、自然な母音體系である。カシュミール語の母音音素目録は /i, e, ɐ, o, u, i, ɤ, ɜ/ とされ、低母音が（最も良く現はれる異音として）後舌母音で現はれる點も森博達（1991）の分析と一致する。

加へて、通時的な母音融合の観点からも、この體系は妥当であると考えられる。恐らく飛鳥時代以前のある時期まで、日本語には生産的な音韻規則としての母音融合が存在した。^(注25)諸家見解に相違はあらうが、通時的には ai > エ列乙類、ia > エ列甲類^(注26)であつた事については見解の相違はないだらう。

今、日本語諸方言・諸言語の通時的變化として *ai の母音融合の結果現はれてゐる音聲とその方言で想定される音素について示すと、例へば以下の様になる。

- (14) a. *ai > ɛ, æ, ɛæ^(注27)（共時的解釋は /ɛ/）（傳統的東北方言）
 b. *ai > ɜ^(注28)（共時的解釋は /ɛ/）（南琉球語波照間方言・白保方言）

先に見た様に、森博達（1991）によつてエ列乙類は非前舌母音を持つてゐたと考へられた。この中の æ も中古漢語には低母音に前舌（麻韻二等）と後舌（歌韻一等）の對立があつたことからおよそあり得ないと考へられる。ここで残るのは (14) b だが、この音素 /ɛ/ の音聲實現形は加治工真市（1984）によれば、[ɜ] であるとされる。恐らく、音聲的に中舌の母音を持ち、且四段の開口度を持つ時、ai の母音融合では（非圓唇）中低母音が現はれるのであらう。^(注29)

そして、少なくともイ列・エ列・オ列乙類の音素は何れも母音であると考え、開口度を三段と想定すると、大野晋（1974）や大野晋（1982）の様な問題が生じた。そこで四段の開口度を設定し、森博達（1991）の研究結果に従つて、音聲的には（非圓唇）中舌中低母音と考へ、(14) b を参考にエ列乙類には /ɜ/ を想定する。

イ列・オ列乙類には /i/・/ɤ/ を想定する。^(注30)是は既に想定されてゐる高母音 /i/, /u/ 及び /e/, /o/ に對しては、先行研究からも音聲的には中舌の母音を想定

その中でも後舌母音には非圓唇・圓唇の對立が存在する。

そして、この體系は「一般的に高母音の方が低母音よりも数が多い」「一般的に前舌母音の方が後舌母音より数が多い」といふ類型論上の強い傾向に反さない。^(注23)

また、Maddieson and Precoda（1992）で検索

するのが妥当であるからである。また Maddieson and Precoda (1992) によれば、中低母音に /ɜ/ を持つ言語で對立する高母音が存在する時、常に /i/ である。^(注31)ここからイ列乙類は /i/ とする。

さて、最も音聲的記述も進んで居る A. D. 720の上代語音節表は次の様にならう。

表10 A. D. 720の上代語音節表

	∅	p	b	m	t	d	n	$\widehat{ts}$	$\widehat{dz}$	$r^{(注32)}$	k	$g^{(注33)}$	j	w
i	i	pi	bi	mi	ti	di	ni	$\widehat{tei}^{(注34)}$	$\widehat{dzi}$	ri	ki	gi		wi
i		pi	bi	mi							ki	gi		
e		pe	be	me	te	de	ne	$\widehat{tce}$	$\widehat{dze}$	re	ke	ge	je	we
ɜ	ɜ	pɜ	bɜ	mɜ							kɜ	gɜ		
a	a	pa	ba	ma	ta	da	na	$\widehat{tsa}$	$\widehat{dza}$	ra	ka	ga	ja	wa
ə	ə				tə	də	nə	$\widehat{tsə}$	$\widehat{dzə}$	rə	kə	gə	jə	
o		po	bo	mo	to	do	no	so	zo	ro	ko	go	jo	wo
u	u	pu	bu	mu	tu	du	nu	su	zu	ru	ku	gu	ju	wu

4.2 音韻規則と基底形

表10を得る規則は表11の様になる。規則の順序は (15) a → b → c → d → e と
なる。

表11 (15) 音韻規則

a. 前舌化 ^(注35)	b. 上昇と前舌化 ^(注36)	c. 圓唇化
i → i/ts, dz, t, d, n, r, j, w, ∅	ɜ → e/ts, dz, t, d, n, r, j, w	ə → o/C[+labial]
d. 接近音削除		
[+tense, +high, -syllabic, αfront, βback] → ∅ / __ [+tense, +high, +syllabic, αfront, βback] ^(注37)		
e. [+front] 化		
[+strident] → [+strident, +front] / __ [+syllabic, +front] ^(注38)		

(15) a, b, c は /w/ 及び /∅/ による物以外は順行同化、/w/ による前舌化は順行異化。但し (15) b における上昇は順行同化、/∅/ による前舌化に就ては後述する。

(15) d は [syllabic] 素性のみが後續する母音と異なる子音が先行した時に生じる削除。(15) e の [+front] 化に就ては今後の子音目録の議論の際に論ずる。

さて、基底形は形態変化の様相、所謂「被覆形」「露出形」の交替對、有坂・池上の法則第一則、語根の交替對から得られる。例へば「上二段動詞連用形」の語末はイ列乙類 /i/ だが、「カ行上二段活用動詞「起く」」の場合、形態素基底形 //əki// のまま、基底形 /əki/、表層形 [əki] が現はれる。しかし「タ行上

二段動詞「落つ」(//ɔti// 及び /ɔti/) の場合、/t/ の後で /i/ と /i/ の対立が中和して [ɔti] で現はれる。

「下二段動詞」からは基底形にエ列乙類が得られる。「果つ」(「下二段動詞」連用形) の形態素基底形は //pat3//。基底形・表層形は /pat3/・[pate]。「カ行下二段動詞「開く」」の形態素基底形は //ak3//。基底形・表層形は /ak3/・[ak3]。

有坂・池上の法則(池上禎造(1932)、有坂秀世(1932)、同(1934))の第一則から、オ列甲類とオ列乙類は同一語根内に共存しないと豫想される。これは C [+labial]^(注39) の後で破られる。例は次の通り(各音節のピッチは秋永一枝他編(1997)による)。

(19) [wonɔ][LL]「斧」(cf. [tɔnɔ][LL]「殿」)

ここから、オ列乙類 //wɔnɔ// 及び /wɔnɔ/「斧」(//tɔnɔ// 及び /tɔnɔ/「殿」)を得る。

/ji/ は、[juku]—[iku]^(注40)「行く」の交替から、夫々に //juku//—//jiku// 及び /juku/—/jiku/ を設定し得られる。^(注41) /ji/ は「下二段動詞「悔ゆ」連用形」に基底形 //kuji// が設定され、ここから得られる。

/j3/ は「下二段動詞「見ゆ」連用形」から。形態素基底形は //mij3//。基底形・表層形は /mij3/・[mije]。

/wi/ は「ワ行下二段活用動詞「居(ウ)」」や名詞「禮」の交替對 [wija]—[uja] から得る。前者は日本書紀卷第五訓注に「急居、此云菟岐于(ツキウ)」と見える。ここからの「居(連用形)」の形態素基底形を //wi//、基底形・表層形は /wi/・[wi] とする。/wu/ はその「終止形」から。「禮」の場合は前者から /wi/、後者から /wu/ が得られる。

/w3/ は「下二段動詞「植う」連用形」から。形態素基底形は //uw3//。基底形・表層形は /uw3/・[uwe]。

處で、この解釋ではこの言語に音素としての二重母音も長母音もない。つまり音節構造は CV 或は (C)V である。前者ではないことは笠間裕一郎(2015)で論じた。後者が妥當であることも笠間裕一郎(2015)ですでに論じたが、改めて派生音韻論に基づいて簡単に述べる。

上代語で二重母音の例と考へられる可能性があるのは、「ヤ行上二段動詞」の所謂「未然形」(實は單なる「ヤ行上二段動詞」語根)と「連用形」「命令形」、及び「マウス」(申す)・「マウク」(設く)^(注42) 及び「カイ」(擧)・「カイク」(搔

い貫く)、長母音の例と考へられるのは「ワ行下二段動詞」の「終止形」「連體形」「已然形」、及び『新譯華嚴經音義私記』に見える「加安」(蚊)^(注43)の例ぐらいである。母音連続があつたとしても、母音間に音節境界があり、音節構造は(C)^(注44)Vであつたと考へて良い。實際、何れの例も音素配列規則や形態音韻規則、語最小性等によつて、ある種臨時に生じてゐる。

イ列乙類、エ列・オ列甲類がその母音單獨で現れないのは次の様な事情に依る。この言語の母音のみからなる音節は、基本的に形態素初頭にしか現はれない。^(注45)派生音韻論に依て考へるならば、上代語は接辭境界に母音が連続することをゆるさなかつたと考へられる。^(注46)結果的に(非複合)語中で母音のみからなる音節は、音素配列規則・形態音韻規則や、語最小性がそれを要求する時のみ現はれる。一方で、これ等 /o, e, i/ は歴史的には二重母音出自で、共時的には表層で語頭には現はれない^(注47)(大野晋(1977) 参照)。先に述べた様に、語中に母音連続が現れるのは、この言語では基本的に形態音韻規則がそれを要求する時である。だが、これらの内 /o, e/ は語中・語末さらには語頭位置でもその様な母音連続を惹起こす形態音韻規則に關與しない。それ故、第一音節に單獨で現はれないし、第二音節以降でも現はれない。形態素初頭位置にあつて、かつ動詞や形容詞の語形變化に關はる(詰り、形態音韻規則に關與する)母音は /ɜ/ (「得」の動詞語根)位である。また、有坂秀世の言ふ「被覆形」「露出形」の交替對等から、形態素初頭や語中にこれら /o, e/ からなる母音のみの音節を基底に想定できる形態素は無い。その上、擬音語や重複語でない限り、/o, e/ は夫々語根内部で共起しない。その結果、單純語の初頭にしか現はれ得ないにも關らずそこに /o, e/ は無いので、基底においても單獨では現はれない。一方でイ列乙類は對立するイ列甲類に對して有標である。イ列乙類は基底で「被覆形」「露出形」の交替對から形態素初頭に設定されるものが存在する(「息」/iki/—/ɜki/)。然し乍ら、イ列乙類が單獨で立ち得る位置は、接辭初頭にはないので語頭のみとなる。それ故その出現頻度は非常に低くなり、早くにイ列甲類へ合流して仕舞つたものとみられる。共時的には音素配列規則によつて表層で現れないと言ふ事になるだらう。「母音(的特徴)對立説」をとつた説に對しては、この分布、即ち何故イ列乙類・エ列甲類・オ列甲類がその母音單獨では現はれないのが問題にされたが(例へば松本克己(1976))、この様な事情があつたと考へる。これを表の形で纏めれば表12の通り。

先にも述べた様に、上代語の音節構造は(C)Vである。是に關して早田輝洋(1998b)は「世界の諸言語で、開音節のみで母音の音韻論的長短の区別のない

表12 母音單獨音節の出現位置の纏め

	表層で				
	A. 形態素初頭				B. 語中
C. 母音 單獨音節	Aに於けるC	A以外に於けるC	「被覆形」「露出形」のCの 交替對	Aに於けるC の交替對	Bで形態音韻規則 に關與して、Cが 現れ
ア	有	有（「蚊」）	無	有（例、おの 「己」）	る事あり（語彙 最小性）
イ甲	有	有（や上二、 「權」）	無	無	る（「音便（權）・ や上二）
イ乙	無	無	有（例、おき 「息」）	無	ない。抑々關與 しない（音韻規 則による）
ウ	有	有（ワ下二、 「マウス」 「マウク」）	無	有（例、おム ガシ）	る（ワ下二）
エ甲	無	無	無	無	ない
エ乙	有	無	無	無	る（「ア下二「得」）
オ甲	無	無	無	無	ない。抑々關與 しない
オ乙	有	無	有（例、いき 「息」）	有（例、アナ 「己」・ウムガ シ）	ない。抑々關與 しない

言語は管見に入らない。」「即ち唯一の音節構造が/(C)V/ ^(注48)であり、その/V/に
何らかの長短あるいは閉音節性（の発展形）の見られない言語は、あるとしても
も余程稀であろう。」と述べる。

確かに上記の様な言語は非常に稀であらうが、開音節のみで母音の音韻論的
長短の區別のない言語としては、ロトカス語アイタ方言（Robinson（2006））が
指摘できる。従つて上述の早田輝洋（1998b）の指摘は母音體系の通言語的傾向
同様、強い傾向性とは言へるだらうが、上代語は個別の論據（例へば mi_{語根} +
「連用形」屈折接辭 [i → mi_o]）から上述のロトカス語アイタ方言同様 (C)V 構造と考へ
るべきである。

			基底で	状況は		その理由は、	
	語境界	各母音の				通時的には	共時的には
ヤ行・ワ行子音との音素配列規則に關與して、現れ	で形態音韻規則に關與し、Cが現れ	共時的有標性は	の形態素初頭に	基底にCは	表層にCは		
る。抑々關與しない	ない。抑々關與しない	無標	有	有	有		
る（ヤ上二）	ない。抑々關與しない	無標	有	有	有		
ない。抑々關與しない（音韻規則による）	ない。抑々關與しない	有標	有	有	無	有標なイ乙のイ甲への合流	通時的結果としての制約
る（「マウス」「マウク」）	ない。抑々關與しない	無標	有	有	有		
る。抑々關與しない	る（ク語法）	有標	無	無	無	前々代の制約が ^(註49)	偶然、ない
ない。抑々關與しない（音韻規則による）	ない。抑々關與しない	無標	有	有	有		
關與しない	ない。抑々關與しない	有標	無	無	無	前々代の制約が ^(註50)	偶然、ない
ない。抑々關與しない（音韻規則による）	ない。抑々關與しない	無標	有	有	有		

5 通時的變化

次に通時的變化について考へてみる。「8母音説」に對する批判として、母音體系が不自然である點と同時に松本克己（1984）に見られる、合流過程への批判がある。一般にイ列・エ列・オ列ともに乙類が甲類へ合流したと考へられてゐるが、エ列・オ列甲乙の出現頻度は（兩者の對立がある場合）乙類の方が高い（大野晋（1977））。是は「二つの音が合流する場合には、特別の環境によつて条件づけられた部分的合流を除き、劣勢（＝有標）音が優勢（＝無標）音に合流する」（松本克己（1984）より）といふ一般の原則に反する。

所で、「ア列音」を見るに、そこに現はれる母音は^(註51) /i, a, u, ə, ɜ/ の五つで、先に示された「合流の一般的原則」に反さない。母音體系表を書くと表13の様な

表13 ア列音のみを見た場合
の上代語の母音體系

	前舌	後舌
		圓唇
高	i	u
中高	ə	
中低	ɜ	
低	a	

體系となる。

この體系を見ると、これは先に言及された通言語的一般性に反さない。所が今、Maddieson and Precoda (1992) によつて、此の様な母音體系が存在するか否か調べてみるに存在しない。恐らく言語普遍に反する體系なのであらう。

此の様な不安定な體系を避ける方策として、(15) にて述べた規則を同方言では適應されてゐ

ない環境下、即ち (15) a, b ならば [-anterior], [-coronal] の子音の後、(15) c ならば [-labial] の子音の後にも擴張した合流が生じたと考へる。この合流は、通言語的に一般的な母音體系への變化を志向してをり、Greenberg (1966) の指摘する言語普遍「共時的に存在しないタイプを惹起す通時的變化はない」に反さない。そこでこちらが選擇されたのであらう。

6 終はりに

以上、上代特殊假名遣の甲乙の別に對して、母音（的特征）に辨別の特徴を求める見解について検討し、僻見を述べた。

僻見についても、猶考へるべき處はあると思はれるし、また、甲乙の別を子音（的特征）に求める説の検討もまだである。

今後はこれらについて検討を加へ、この問題のさらなる議論の發展に貢獻できればと思ふ。

(注1) これらをそれぞれの對立についての見解から纏めると次の様になる。

表2 上代特殊假名遣と各甲乙の別に想定する對立の様相

イ列 甲乙	/i/ 對 /ɪ/	Yoshitake (1934)、Sibata & Mitsuishi (1979)
	/i/ 對 /i/	大野晋 (1974)、Sibata & Mitsuishi (1979)、大野晋 (1982)、森博達 (1981a)
	/i/ 對 /ui/, /oi/	早田輝洋 (2009)
エ列 甲乙	/e/ 對 /e/	Yoshitake (1934)
	/e/ 對 /ẽ/	大野晋 (1974)、Sibata & Mitsuishi (1979)
	/e/ 對 /ɜ/	大野晋 (1982)
	/e/ 對 /oi/	森博達 (1981a)
	/e/ 對 /ai/	早田輝洋 (2009)
オ列 甲乙	/o/ 對 /o/	Yoshitake (1934)、Sibata & Mitsuishi (1979)
	異音關係	松本克己 (1976)
	/o/ 對 /ø/	服部四郎 (1959)、大野晋 (1974)、大野晋 (1982)
	/o/ 對 /ɔ/	森博達 (1981)、早田輝洋 (2009)

(注2) Yoshitake (1934) は、その音韻論的解釋を示してゐないが、ここでは、音聲と音素の乖離を想定してゐないものとして、以下議論を進める。

- (注3) 音聲的には [ɪ] とする (森博達 (1991))。
- (注4) 音聲的には [aẽ] とする (森博達 (1991))。
- (注5) 大野晋 (1982) の記す處では、唇の緊張の有無による對立を考へてゐる様である。しかし、これに依つて、どの様な母音體系が想定されるのかは分からない。
- (注6) 大野晋 (1982) の /f/ は無聲兩唇摩擦音 /ɸ/ かと思はれる。この點は三石泰子 (1987) も同じ。所謂「濁音」に對しては、一律前鼻音を想定する解釋、更に進んで「清濁」の對立を前鼻音の有無とする解釋が存在するが、本稿の議題とは直接の関係はないので、以下では前鼻音の存在は想定せずに進めて行く。
- (注7) 大野晋 (1974) による。抽象的には [-syllabic, +labial]。猶、服部四郎 (1976a) の解釋では /f/ は /p/, /w/ は半母音 /ū/ とされる。
- (注8) 韻母の推定音價は伊藤智ゆき (2007) による。是は平山久雄 (1967) を平山氏の教示により一部改めたものであり、現在の平山氏の見解に基づいてゐると考へられるからである。
- (注9) 森博達 (1991) の二・二・二では、音節「そ (乙類)」に對して當てられた「曾」を端母としてゐるが、從母に改める。
- (注10) 夫々の聲母を持つ字が用ゐられた理由に就ては、森博達 (1991)、同 (2003) を參照されたい。
- (注11) Sibata & Mitsuishi (1979) は、ア列音とオ列乙類音が何れも低母音であるからこの様な自然類をなすとも言へなくはないが、調音音聲學的に妥當な説明は困難である。低母音で尚且つ後舌母音であるならば、猶更後續する母音の調音に合はせる形で齒莖での破裂が生じてゐない事が、表7の分布からは豫想される。
- (注12) 松本克己 (1975) では /i/ を含めた6母音體系とする。しかし以下の議論とは直接関係無いのでこの點の相違は無視して議論を進める。
- (注13) 「越」は『古今和歌集』聲點本の例。「厩」の例は『倭名類聚抄』伊勢二十卷本の例。
- (注14) 早田輝洋 (1998a) は同方言を H、L、R 三式からなる語聲調言語と、鈴木豊 (1999) は調素論的解釋によりピッチアクセント言語と、屋名池誠 (2004) は「核」と「抑壓限界」からなるピッチアクセント言語と考へてゐるやうである。他の解釋として服部四郎 (1973)、中井幸比古 (2003) 等が擧げられる。これら解釋でも結論は同じである。
- (注15) これについても松本克己 (1984) にエ列乙類との並行性からの批判が存在する。
- (注16) 子音音素については森博達 (1991) に基づいて、以上の様に想定した。以下同じ。
- (注17) k, g は Hayes (2009) によれば素性 [+high] を持ち、寧ろ上昇を引き起こしさうなものである。
- (注18) 猶 Casali (1998) は母音融合を對稱的と非對稱的の二種類に分ける。本稿の議論と關係するのは後者である。後者の場合 Casali (1998) では、e-coalescence と e-coalescence に細分される。
- (注19) 野村正良 (1959) 參照。
- (注20) 實は名詞化接辭 //i// を取つた派生名詞。
- (注21) これを回避するには次の様に分析せざるを得ない。
- (11) 「ク活用形容詞」の場合
- a. taka] 形容詞語基+名詞化接辭 [ø → taka
- b. takas] 形容詞語基+名詞化接辭 [ø → taka (末子音削除)
- (12) 「シク活用形容詞」の場合

a. kanasi]形容詞語基+名詞化接辭[∅→kanasi

b. kanasis]形容詞語基+名詞化接辭[∅→kanasi (末子音削除)

(11) (12) 何れの場合もこの場合、「終止形」屈折接辭として2形態素(aならば//si//と//i//若しくは//∅//)必要になり、夫々が語彙的規則により選擇されてゐると考へざるを得ない。

(注22) 猶、/a/の音聲實現形は森博達(1991)によれば[a]である。前舌母音との對立はないので/a/と解釋する。また、中古漢語には低母音に圓唇・非圓唇の對立はない。森博達(1991)が示す「サ行」子音の現れ方からも後舌とは解釋しがたい。

(注23) 音韻論的解釋をした場合、後舌母音の方が数が多くなる事が有る。ラフ語も恐らくこのタイプ(Matisoff(1973)参照)。上記の上代語(奈良時代日本語奈良方言)の母音體系も音韻論的解釋を施したものである。

(注24) カシュミール地方で話されてゐる言語。インド・アーリア諸語のダルド語群に屬する。話者人口は200~300萬人。以上『言語学大辞典 第1巻 世界言語編(上)』による。猶、カシュミール語の最新の記述として、Koul and Wali (2006)が存在する。こちらでは/i, e, a, o, ɔ, u, i, ə/が立てられてゐる。是は一般的な母音體系からは外れる。恐らく/ɔ/が/a/に、/a/が/ɔ/に、/ə/が/ə/に改められるのではなからうか。猶、Koul and Wali (2006)の解釋は、既にBhat (1987)で示されてゐる所であるといふ點も付け加へておく。

(注25) 形態音韻規則としての母音融合は、この時代にも猶存在したと考へられる。例へば「助動詞り」は動詞語末の「連用形」屈折接尾辭の//i//と語根arの初頭母音が融合して/e/になる。これは次の様に表示される。猶、「ありありて」は熟語と考へる。

(13) i[「連用形」屈折接尾辭+語根[ar→er

(注26) 前者の例としてnaga(「長」)+iki(「息」)>nageki(「歎き」)、後者の例として所謂子音語幹動詞及び「サ變」動詞命令形(何れも…C]動詞語幹+「連用形」屈折接尾辭[i+感動詞[a+…Ce]が擧げられる。他にu+i, ə+i>イ列乙類の例として所謂「上二段動詞連用形」(…u, ə]動詞語幹+「連用形」屈折接尾辭[i>…i]が擧げられる(以上大野晋(1982)参照)

(注27) 齋藤孝滋(1993)等。

(注28) 他の解釋としてAso(2010)、パツバラルド、ジゼツペ(2009)がある。一方で加治工真市(1984)とほぼ同様の解釋をUemura(2003)がする。

(注29) 因みにCasali(1998)では四段の開口度を持つ言語で、且彼の言ふ非對稱的母音融合の時は中央カンバリ語を除きε-coalescenceである。

(注30) 服部四郎(1958)はイ列・エ列乙類に對し/i/・/ɔ/を想定する見解に、次の如く述べる。

「[キ][ギ][ヒ][ビ][ミ][ケ][ゲ][ヘ][ベ][メ]の場合は、母音音素たとえば/i/と/i/および/e/と/ɔ/による区別だとすると、なぜこれらの音節に限り母音音素が二種類あったのか、説明に困る。」

ここから進んで、イ列・エ列甲乙の對立を/j/の有無とする解釋を提示するのであるが、4.2に述べる規則や注36で言及する諸言語に見える規則を鑑みると、決して「説明に困る」様な事はない。

(注31) オ列乙類に關して/ə/を想定しないのは、四度の開口度を持つ言語で、/ɔ/に對立する高母音を持つ言語ならば、中高口母音は/ə/ではないからである。ただし、

Maddieson and Precoda (1992) において、その様な母音體系を持つ言語は僅少であるので、ここで参考までに述べるにとどめておく。

- (注32) 森博達 (1991) では [ɪ]。本稿では /r/ とし、以下 r で表記する。所謂ラ行子音の音聲的ステータスについては Hayata (2000) も参照の事。
- (注33) 森博達 (1991) は [ŋg] とする。以下では /g/ としておく。
- (注34) 森博達 (1991) では [tʃi]。後続母音 /i/, /e/ による [+front] 化の方がより妥當であるので改める。これについては、音節「セ」「ジ」「ゼ」も同じ。
- (注35) 次註に挙げるカバルダ語及びラフ語の規則も参照。
- (注36) /j/ と /w/ を除けば、これ等は [+anterior] [+coronal] 素性を持つ子音 /ts, dz, t, d, n, r/ が先行した時に、これ等素性が關與し、母音の上昇と前舌化が引き起こされてゐると考へられる。またこれは調音運動の弱まりである。(自然な發話においては)、低母音の發話では顎を開く運動が同時に生ずるが、冠音子音の調音には一度顎を閉ぢる必要がある。

冠音子音に續いての低母音の發聲、例へば [tɜ] の發聲には、顎が閉ぢた状態から開いた状態へと (自然な發話では) 移行させる必要がある。この運動が弱まりこの規則が生じたらう。

ちなみに先行子音による母音の上昇と前舌化の規則を持つ言語の一例としてカバルダ語を挙げる事が出来る。Colarusso (1992) は (16) の如く纏め、(17) の様な例を挙げる。

- (16) [+syllabic] → [xback, yhigh, zround, ulow, vATR] / [xback, yhigh, zround, ulow, vATR]__
(一部書式に合せ表記を改めた)

例は次の通り。

- (17) a. /ɛa/ → [ɛɛ], [ɛɛə], [ɛə]
b. /ɛə/ → [ɛɪ⁽ⁿ⁾], [ɛɪ⁽ⁿ⁾]

(記號を通行の IPA のそれに改めた。)

この例は、[ɛ] の素性のうち [+high] 素性が母音の上昇に關與してゐると考へられる。

そこでもう一つ、ラフ語の規則を挙げる (Matisoff (1973), Flemming (2003)。今前者による。)

- (18) [+high, back, +retracted] → [+2 high] / [+coronal]__.
(一部書式に合せ表記を改めた)

(18) の規則の内 2 が示すのは、Matisoff (1973) によれば、具體的には [ɣ] である。カバルダ語に對してラフ語の場合は、冠音による上昇が生じてゐるとされる。猶、Flemming (2003) は Matisoff (1973) [ɣ] を成節子音 [ɣ] としてゐる。Matisoff (1973) は [ɣ] を [i] の直上に置くが、[ɣ] であれば、同時に舌の前進も生じてゐると考へられる。猶、イ列乙類が [ɣ] や [ɣ] で現はれなかつたのは、摩擦噪音を持つ分節音が音節核たり得なかつたからだらう。

- (注37) [+tense, +high, -syllabic, afront, βback] は /j/, /w/, [+tense, +high, -syllabic, afront, βback] は /i/, /u/。
- (注38) [+strident] は /ts/, /dz/, [+syllabic, +front] は /i/, /e/。
- (注39) 他に有坂・池上法則が破られる場合として、山上憶良歌謠の「音 (オと)」の例が存在すると指摘されることがある。これは彼が『佛足石歌』の作者と同様の状況にあつたからと考へる。『佛足石歌』には音節「と」の甲乙の別が破られる例が見

られる。

猶、憶良は「問ふ」「取る」に就て、家持同様の表記をすることが知られてゐる。これは、『萬葉集』中では彼らのみに見られる特徴であり、或る種の假名遣であつたのだらうと考へられる（大野晋（1982））。

- (注40) /u/—i/の交替は、他に /pits/（「一」）—/puta/（「二」）がよく知られる處である。しかしこれは造語法とも考へられるので、「行く」の基底形を /jiku/ とする根據としては弱い。
- (注41) [iku]「行く（「連用形」）」を //jiku// と考へると、關與する派生規則が二つになり冗長。
- (注42) 前者の基底形は交替對「まをす」（[mawosu]）の存在から、/mawusu/ であつたと考へられる。後者は同様に交替對「まをく」（*mawoku）が存在したが、「まをす」と比較して使用頻度が少ないのでたまたま現はれなかつた、或いは語源說「眞」+「受く」を参照し、當時は二語であつたと考へておく。
- (注43) この點についての笠間裕一郎（2015）の説明は不十分であつた。勿論文獻言語學の方法論上2形態素立てるのが最も穩當な解釋である。しかし長短の區別はなく、兩者は自由異音であると云ふ解釋も（文獻言語學的には危ふさはあるが）可能である。猶、2形態素 //ka// と //kaa// を立てても、兩者に意味的な相違はないので、母音の長短はやはり辨別的ではない。[kaa] はこの言語で恐らく唯一の長母音の例であるが、これはこの言語には挿入が存在しなかつたと考へられる爲である（笠間裕一郎（2015））。
- (注44) 「ワ行下二段」動詞や「マウス」（申す）「マウク」（設く）の場合には、一應二重母音とも考へられないことはない。だが、この言語の動詞・形容詞の形態論の分析を最適性理論（Prince and Smolensky（1993/2004, 深澤譯2008））を用ゐて進めると、文法語中の母音連續の禁止 *VV（Gr-Wd）や複雑構造の禁止 *COMPLEX（Prince and Smolensky（1993/2004, 深澤譯2008））がかなり強く働いてゐる事が知られる。例へば次の評價表の例では *COMPLEX が關與し、二重子音が現れる候補が敗北してゐる。

*COMPLEX は二重子音及び二重母音を禁止する制約である。この言語ではこの制約が高い階層にあるので、當然どちらもあり得ない。*VV（Gr-Wd）は例へば「二段」動詞「連用形」や「ク活用」形容詞の「終止形」以外の活用形で關與的である。制約、形態素については笠間裕一郎（2015）参照。

この様に基本音節構造を（C）V であると考へることで、この言語の形態論の記述が無理なく可能になる。

評價表 /nak-raj3-ur/「泣かゆ」の出力

/nak-raj3-ur/	MAX (root; C1)	*COMPLEX	NoCODA
na.kra.ju		*!	
na.kr.aj.u		*!	*
nak.raj.u			**!
na.ra.ju	*!		*
na.ra.ju	*!		
nak.a.ju			*!
na.ka.ju			

残る問題は「加安」(蚊)の例である。これは恐らく制約 FtBIN (Prince and Smolensky (1993/2004, 深澤譯 2008)) が *COMPLEX と同一階層に存在し、他の制約含めても、[ka] も [kaa] も調和度について同じであつたからであらう。

結局、派生音韻論をとつた場合と非派生音韻論をとつた場合で、語中に生じたア列音の頭子音の有無と「加安」(蚊)の例の扱ひが異なつて来る。具體的には、「蚊」[kaa]の例(と「ま楯掻い貫き」(萬葉集3993番歌)の例。但しこちらは變換とも考へられる。)を除き、非派生音韻論では母音連續が現はれなくなる。

- (注45) しかも最適性理論による分析では、*VV(Gr-Wd)が高い位置に存在するので、「蚊」の時、即ち制約 FtBIN による時(か、或は「掻い貫き」で「音便」が生じた時。これは C]動詞語根-動詞語根[C による「音便」かとも思はれる。)のみ語中に現はれる。因みに權「カイ」は、平安時代語の「アクセント」資料からすると、ピッチパターン [LH] で、音節境界が存在したとも考へられない事はない(勿論これが決定的な證據にはならない)。元は動詞「掻く」に「音便」が生じた轉成名詞。
- (注46) 當然長母音 ViVi も許されない。これも上代語の音節構造が(C)Vである事の證左となる。
- (注47) 複合語では現れ得る様であるが、それが「アクセント」から考へて、本當に複合語といへるのかは、考へる必要がある。
- (注48) この部分、基底に於て此の様な構造しかあり得ないと言ふのであれば、筆者は四段動詞を子音語幹動詞とみて/(C)V(C)/を認めるので問題にならない。結局この言語では、表層に於て音節は(C)Vとなると筆者は考へてゐる。
- (注49) 具體的には語頭の母音連讀 ia の禁止 (*語[ia])。
- (注50) 具體的には語頭の母音連讀 ua の禁止 (*語[ua])。注49と纏めると語頭の上昇二重母音が前々代には禁止されてゐたものと思はれる。猶、オ列甲類の出自を母音連讀 ua に求める見解は大野晋(1978)を参照。
- (注51) 「え」を /ɜ/ としたのは、この音節を乙類相當とする森博達(1991)135頁の音節表による。

参考文献

- Aso, Reiko (2010) Hateruma (Yaeyama Ryukyuan) *An introduction to Ryukyuan languages*. Tokyo; Japan: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
- Bhat, Roop K. (1987) *A Descriptive Study of KASHIMIRI*. Delhi; India: AMAR PRAKASHAN
- Casali, Roderic F. (1998) *Resolving Hiatus*. New York & London: Garland
- Colarusso, John (1992) *The Grammar of the Kabardian Language*. Calgary, Alberta; Canada: University of Calgary Press
- Flemming, Edward (2003) "The relationship between coronal place and vowel backness" *Phonology* 20
- Greenberg, Joseph H. (1966) "Synchronic and diachronic universals in phonology." *Language* 42-2
- Hayes, Bruce (2009) *Introductory Phonology*. West Sussex; United Kingdom: Wiley-Blackwell
- Koul, Omkar N. and kashi Wali (2006) *Modern Kashmiri Grammar*. Springfield; USA: Dunwoody Press
- Matisoff, James A. (1973) *The Grammar of Lahu*. Berkeley, Los Angeles & London: University of California Press
- Hayata, Teruhiro (2000) "The Liquid and Stem-final Vowel Alternations of Verbs in Ancient Japa-

nese”『言語研究』118

- Robinson, Stuart (2006) “The Phoneme Inventory of the Aita Dialect of Rotokas.” *Oceanic Linguistics* 45-1
- Sibata, Takesi and Mitsuishi, Yasuko (1979) “Historical Relationship between the Nara-Period Old Japanese and the Dialect of Shiba, Kakeroma, Amami Islands” G. Bedell, E. Kobayashi, M. Muraki (eds.) *Explorations in Linguistics, Papers in honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha
- Uemura, Yukio (2003) *The Ryukyuan language*. 文部科学省特定領域研究環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究「環太平洋の言語」成果報告書 A4-018
Osaka; Japan; Osaka Gakuin University
- Yoshitake, Saburō. (1934) *The phonetic system of ancient Japanese* James G. Forlong Fund Volume XII. London; United Kingdom: The Royal Asiatic Society.
- 秋永一枝他編 (1997)『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版
- 有坂秀世 (1932)「古事記に於けるモの假名の用法について」有坂秀世 (1957) 再録
- 有坂秀世 (1934)「古代日本語に於ける音節結合の法則」有坂秀世 (1957) 再録
- 有坂秀世 (1957)『国語音韻史の研究』増補新版 三省堂
- 池上禎造 (1932)「古事記に於ける假名「毛・母」に就いて」2-10
- 伊藤智ゆき (2007)『朝鮮漢字音研究 本文篇』汲古書院
- 井上史雄他編 (1996)『日本列島方言叢書⑩ 中部方言考③ 岐阜県・愛知県』
- 大野 晋 (1974)『日本語をさかのほる』岩波新書
- 大野 晋 (1977)「音韻の変遷 (1)」大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語』5 岩波書店
- 大野 晋 (1978)『日本語の文法を考える』岩波新書
- 大野 晋 (1982)『仮名遣と上代語』岩波書店
- 笠間裕一郎 (2015)「音節構造と国語史」『文献探究』53
- 木田章義 (2012)「上代特殊仮名遣と母音調和」『国語国文』81-11
- 金田一春彦 (1983)「方向観による平安朝アクセント」金田一春彦2001再録
- 金田一春彦 (2001)『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館
- 齋藤孝滋 (1993)「岩手県三陸町綾里方言の音韻」『東北大学文学部日本語学科論集』3
- 鈴木 豊 (1999)「アクセント史研究における拍内下降」『国文学研究』128
- 中井幸比古 (2003)「アクセントの変遷」上野善道編『朝倉日本語講座』3 朝倉書店
- 野村正良 (1959)「愛知県西春日井郡北里村」『日本方言の記述的研究』井上史雄他編 (1996) 再録
- 服部四郎 (1958)「奄美群島の諸方言について——沖縄・先島諸方言との比較——」服部四郎 (1999) 再録
- 服部四郎 (1999)『日本語の系統』岩波文庫
- 服部四郎 (1973)「アクセント素とはなにか? そしてその弁別の特徴とは? ——日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって、“調素”の単なる連続にあらず——」『言語の科学』4
- 服部四郎 (1976a)「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5-6
- 服部四郎 (1976b)「上代日本語の母音素は六つであって八つではない」『言語』5-12
- パッパラルド, ジゼッペ (2009)「波照間方言 2 変種の音響音声学比較」『音声研究』16-1
- 早田輝洋 (1998a)「平安時代京畿方言の音調」『大東文化大学紀要 人文科学』36
- 早田輝洋 (1998b)「上代日本語の音節構造とオ列甲乙の別」『音声研究』2-1

- 早田輝洋 (2009) 「上代日本語の母音」『水門 言葉と歴史』 21
- 平山久雄 (1967) 「中古漢語の音韻」『中国文化叢書 1 言語』 大修館書店
- プリンス, アラン、ポール・スモレンスキー、深澤はるか譯 (2008) 『最適性理論 生成文法における制約相互作用』 岩波書店 (Prince, Alan and Paul Smolensky (2004) *OPTIMALITY THEORY Constraint Interaction in Generative Grammar*, Oxford: Blackwell Publishing
- 松本克己 (1975) 「古代日本語母音組織考 ― 内的再建の試み ― 」 松本克己 1995 再録
- 松本克己 (1976) 「日本語の母音組織」 松本克己 1995 再録
- 松本克己 (1984) 「言語史の再建と言語普遍」 松本克己 1995 再録
- 松本克己 (1995) 『古代日本語母音論 上代特殊仮名遣の再解釈』 ひつじ書房
- 三石泰子 (1987) 「奄美大島瀬戸内町芝方言と上代語の音韻対応資料」『熊本短大論集』 37-3
- 森 博達 (1981) 「漢字音より見た上代日本語の母音組織」『国語学』 126
- 森 博達 (1991) 『古代の音韻と日本書紀の成立』 大修館書店
- 森 博達 (2003) 「日本書紀成立論小結 併せて万葉仮名のアクセント優先例を論ず」『国語学』 214 (54-3)
- 屋名池誠 (2004) 「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』 8-2

参考データベース

- Maddieson, Ian and Kristin Precoda (1992) UPSID-PC, USA: UCLA Phonetics Lab Software
<http://www.linguistics.ucla.edu/faciliti/sales/software.htm> より2014.06.06ダウンロード

付記

本稿は、第255回筑紫日本語研究会 (2014. 06. 28 於九州大学) における発表「奈良時代日本語奈良方言の母音體系」の発表資料の大幅な改稿である。猶、本稿の中心的な考へである「三列四段の母音體系」は、筆者の未発表卒業論文「日本書紀諸本の聲點と日本書紀の群に於ける文字用法 ― 原音聲調と語彙とアクセントの関係 ― 」 (2011. 12 提出) に既に示されている。

(かさま ゆういちろう・東京外国語大学大学院博士後期課程)